

新谷田東

長谷川 楓真

いつもと変わらない朝。一発の原子爆弾が人々の日常を一瞬にしてうばった。強烈な熱線、爆風、そして放射線が人々の身体をむしばむ。そんな今では信じられないような事が七十三年前、ここ日本で起こったのだ。今回の広島訪問では、平和記念資料館を訪れた。そこには、戦争、原爆の悲惨さを物語る物が多くあった。ボロボロになった肌着、真黒い焦げた弁当箱、全身火傷の男性の写真。どれも目をそおけなくなるような物ばかりだ。爆発の後、巻き上げられたチリやススなどが放射線を帯びた、黒い雨が降った。この事も初めて知った。人も物も、元の姿とは一変してしまっ、それが原爆の恐しさなのだ。その原爆の恐しさ、今もなお苦しんでいる人がいると、この事を日本人である以上、これからもずくと心に留めておかなければならない。そして、今日学んだことを伝える事、それが平和記念式典に参加した私たちのすべきことなのではないかと思う。平和な毎日がいつ途

絶えてしまふかはわからない。だから私は、
一日一日を大切に夢をもてることのありがた
さを感じながら過ごしていきたい。黒い雨が
降る世界ではなく、幸せが降り注ぐ平和な世
界になることを願う。世界から核兵器が無く
なり、平和記念公園で見た平和の灯が消える
その日まで。